

『ないしょ、ないしょの恋のお話』

著：森本あき

ill：明神 翼

「なんだ、これ…」

文穂は呆(ぼう)然(ぜん)としながら、目の前の光景を見つめた。

目を閉じたら、消えるだろうか。

一(いち)縷(る)の望みを抱いて、ぎゅう、と目をつぶる。

たぶん、夢だ。

そして、きっと、いまも、夢の中にいる。

こほん、とせきばらいをして、気合いを入れるために、両肩、両腕を、バンバン、たたいて、そっと目を開いた。

やっぱり、さっきとおなじものが目に入る。

「うそだろ…」

文穂はつぶやいた。もう一度目を閉じて、また目を開けて。

それでも、消えない。

ありえないものが、そこにある。

というか、いる。

「なんでだーっ！」

文穂は大きな声で叫んだ。びくっ、と、なぜかおなじベッドに寝ている一星の、裸の背中が震える。

酔って、うっかり、だれかと寝てしまった。

そんな経験はないけれど。

泥(でい)酔(すい)した人間なんて、理性のかけらもないんだから、そういうことがあってもしょうがない。別に責めるつもりはない。武勇伝として話している人のことは、その場では笑ってすませて、徐々に距離を置けばいい。

だって、自分なら、そんなことにならない。記憶を失うまで飲むなんて、ありえない。

お酒はほどほどに楽しむ。

そんな大人な飲み方ができるのだと。

だけど、昨日のことを思い出せない。

お店のことは覚えている。一星の言葉どおり、すごくいい雰囲気だった。

まずは、寒いけど、やっぱこれだよな、と生ビールで乾杯して、おつまみをいろいろ頼む。どれも安くておいしかった。

初めて二人きりで飲むから、もっと気まずくなるか、と思っていたけど、全然、そんなことはなくて。話も弾んだし、ずっと笑ってばかりいた。

冷酒がいけなかったんだろうか、と、ぼんやりと思う。

普段はあまり飲まない冷酒が、あんまりにもおいしすぎて。気づいたら、二人で四合瓶を空けていた。そのあともいろいろ飲んだから、許容量をはるかに超えたのだろう。

途中から、記憶が、すっぽりと抜け落ちている。ところどころ覚えてる、とかいう状態じゃない。

まったく、何もない。からっぽ。

だからといって、これはない。

文穂は、自分の体を見下ろした。

きれいに裸。何も着ていない。

そして、一星も、一糸まとわぬ裸。なぜ、わかるのかというと、この寒いのに、布団が全部、めくれてしまっているから。文穂に背中を向けているけれど、筋肉のついたヒップラインが、はっきり見えている。

そんなの見ても、嬉しくない。

だって、俺は、女の子が好きなんだ一っ！

こんな趣味はない。酔って、男と、それも長年、いがみあってきた相手とベッドインするような軽率なことを、するわけがない。

「やって…ないよな？」

文穂は自分の体を、あちこち触ってみた。だけど、よくわからない。男とセックスしたことなんてないから、そのあと、どういう状態になるのかを知らない。

一星をたたき起こせば、くわしい話が聞けるんだらうか。それとも、一星も記憶をなくしているのか。

な一んだ、そうだったのか、とほっとできるのか。ますます青くなるのか。

予測できないから、一星を起こすことをためらってしまう。

だってさ、だってだよ！ 平気な顔で、おお、昨日やったぞ、って言われたら、どう反応すればいいんだ!?

かといって、このまま放っておくわけにもいかない。だって、気になって、気になって、気になりすぎて、ずっと、このことばかりを考えてしまう。

「よし、もうここは心を決めて」

一星を揺り起こそうとしたら、一星が、うーん、とうめきながら、寝がえりを打った。その拍子に、いままで隠れていたものがあらわになる。

ぴきん、と固まった。

無理無理無理無理！

文穂は、ぶんぶん、と首を横に振る。

あんなの入れられたなんて、知りたくない。っていうか、入れられるほうかどうかも定かではないけど。自分が一星を抱いたなんて、それ以上にありえない。

「痛い…よな？」

あのでっかいのが中に埋め込まれたら、いくらなんでも、平気でいられるわけがない。きつと、いまごろ、腰がずきずきしている。

だから、やってない。

絶対に、してない。

「うん、そうだ」

自分に言い聞かせながら、文穂は一星を起こさないように、そーっとベッドから降りた。一星に聞いて、ちがう答えが返ってきたら困るから。

そして、これ以上、一星の裸を正視できないから。

昨日のことは、一星も、たぶん、覚えていないだらう。裸でベッドに寝ていても、一人なら、酔って帰って脱いでしまったのか、と勝手にかんちがいしてくれるはず。

都合のいいように、思い込む。そうじゃないと困るから、決めつける。

だって、ほかにどうすればいい!?
とにかく、ここから逃げないと。
さっさと服を着て、さっさと帰ろう。
文穂は、早着替え選手権があつたら世界記録じゃないだろうか、と自画自賛するほどの速度で洋服を着ると、足音を忍ばせてドアへ向かった。
あそこまでたどりつけば、二人で裸で寝ていた事実なんて、なかったことになる。
ドアノブに手をかけて、ほっ、と息を吐いた瞬間。
「お、文穂。先に起きたのか」
一星の声がした。寝起き特有のかすれ声。
いやいや、問題はそこじゃない。そんなの、わかっている。
でも、目をそらしつづけていたい。
一星が、昨日のことを覚えてそうだ、とか、知りたくなかった！
「いやー、昨日は飲んだな。しかし、文穂、酔うとあんなに大胆になるとは…」
ぎゃあああああああああああ！
叫べるものなら、そのぐらい大きな声を出したかった。耳をふさいで、あー、あー、とわめき、周囲の音を消したかった。
だけど、できなくて。ただ、突っ立ったままにいる。
大胆って、何が？
しらっとした顔で、そう聞ける度胸がほしい。
なのに、実際にできたのは。
「ごめんな、俺、今日、ちょっと用があつたわ」

本文 p141～146 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>